

文学作品における新しい指導法の開発

芥川龍之介「羅生門」における新しい教材観

高知県立高知南中・高等学校 教諭 奥谷 俊子

1 はじめに

『国語総合』にみる「羅生門」

平成11年4月の高等学校学習指導要領改訂に伴い、高等学校国語教科書として従来の『国語』・『国語』に代わり、平成15年4月から新たに『国語総合』が登場した。『国語総合』の科目が立てられた理由として「国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる」とある。

次に挙げる事実がその理由とどのように関わるかは別な問題として、教科書会社10社20種全ての教科書に芥川龍之介の「羅生門」が掲載されている。『国語総合』は、多くの高等学校において、1年生の段階で履修をさせている科目である。その全ての教科書に「羅生門」が採録されるとは、日本の大多数の高校1年生が、教室で芥川龍之介の「羅生門」を学ぶということである。すべての教科書に同一の教材がそろうようなことは、これまでに例がなく、ある意味非常に特殊な出来事であるといえるだろう。それだけに、この出来事は、われわれ現場の教師に大きな問題と課題を与えたということになる。

そこで、本研究では、「今、なぜ『羅生門』なのか」、その教材としての価値を改めて検討し直し、「羅生門」における新しい教材観を提示することを目的とする。ここでは、「羅生門」という作品に顕在する語り手を意識させることで読みの変化は起こりうるのか、「新しい作品論」を提唱する田中実の機能としての語り手について研究を進めることとする。

2 研究の目的

高等学校用の国語教科書に久しく採録されている「羅生門」の新しい教材観の提示

3 研究内容

(1) 先行研究の紹介と批評

これまでの芥川研究者の見解を確認することで、「羅生門」の教材としての功・罪の問題を浮き彫りにしてみたいと考える。

まず、田近洵一は「羅生門」の教材としての価値に疑問を投げかけている代表的な研究者である。田近は、「羅生門」という作品は、高校生に「小説の読み方などを教えるには恰好の教材であるかも知れない」⁽¹⁾とした上で、「しかし、高校生が一度は読むべき国民教材と言われるほどの教材価値のある作品だろうか」⁽¹⁾と批判的な立場を明確にしている。その理由を、「生徒のひとり一人が既成の認識や世間の通念をあてはめ、それで自分なりに了解したように思い込」⁽¹⁾ませてしまうと、それはまさに、「制度化された読み」であり、「『主題読み』の罠にはめ込むような作品」⁽¹⁾であると主張している。

それに対して、関口安義は、この作品の教材価値を高く評価し、次のように述べている。第一は「これが完成度の高い短編小説だということにある」⁽²⁾とし、その分量も「四百字詰原稿用紙で十六枚、教科書に全文採用する小説として、長さの点でも申し分ない」⁽²⁾としている。第二は、学習者が「小説とは何かの学習をするにふさわしい」⁽²⁾作品であり、何より「近代小説にふさわしい構成」⁽²⁾、「起

承転結の構成」⁽²⁾を持っている点を挙げている。そのため、教師にとっては「指導の際に段落構成を考えさせるのもきわめて容易であり、場所・事件・主人公の心理を押さえるのにも、有効に作用する」⁽²⁾として、「がちりとして破綻がない」⁽²⁾構成の巧みさを指摘している。そして、「このようなすっきりした構成の小説を、高校一年生の早い時期に学習」⁽²⁾させることの重要性を説いている。

その他にも、「文学言語の学習に適切な素材」⁽²⁾である点や、「ことばや文章・文体などの学習が成立する点」、「学習者の問題意識を喚起させ、批評意識の養成に役立つ点」⁽²⁾などを挙げ、「羅生門」は「起爆力に富んだテキスト」⁽²⁾であるとしている。

さて、前述した関口とは観点は異なるが、積極的に「羅生門」の教材的価値を評価している研究者として、田中実を挙げることができる。田中は、次のように述べている。

芥川の小説の主眼は登場人物どうしの対立（ドラマ）であるより、そうした人物を<語り手>がどのように捉え、批評していくのかに特徴があると私は考える。すなわち、芥川の「筋のある」小説の特徴を筋そのものの面白さとするより、その醍醐味は登場人物たちのドラマ（葛藤・対立、あるいは主人公の内部における葛藤）を対象化し、登場人物（主人公）に対して<語り手>がその人物の内奥まで解明し、批評の断案を下すところにあり、それは<語り手>が己れの語っている対象にむけて一種の<神>の立場に立とうとする、すなわち主人公を裁こうとすることになると思う。（中略）私は新しい作品論を考える際、<主人公主義的読み>に反対している。作品のなかから主人公（プロット）を追っていただけだと、いかに語られているかという領域が消去されてしまい、小説のなかの一部しか読めない。⁽³⁾

しかし、田中の場合、「羅生門」における新しい読み方の理論は示されているにしても、実際に田中の言う機能としての語り手の在り方を生徒に教えるにはどうすればよいのか、授業実践段階での具体案は何も示されていない。

この「田中理論」に対して阿部昇は、次のように述べている。

小説の読み方を重視している点に、私は賛同する。ただし、残念ながら、その読み方の内実・具体が未だ明確になっていないと私は見る。「読みの本質に根ざした「読み方・読まれ方」の技術」「ことばの仕組み」（田中）と言い、「物語のいつ、どこで、だれが、何を、どんなことを思いながらやったのかということを確認していくというレベルと、その内容がいかに語られているかということ、物語のレベルと小説のレベルという面から、読み取りの技術というものをとらえ返すこと」⁽⁴⁾の必要性（須貝）を主張しているものの、その具体は明示されていない。この状態では、実際に授業の中で子どもたちに読み方を教え学ばせていくことは難しい。⁽⁵⁾

(2) 各社「指導資料」の比較

「羅生門」は、学校現場においてどのような「教え方」をされているのだろうか。授業の組み立てに大きな影響を及ぼす「指導資料」を調査・比較することで大勢を把握できるのではないかと考えた。

まずは、各教科書会社の特徴が最も顕著に現れると考えられる、「主題」の扱い方を比較してみた。「教育出版」の指導資料には、執筆者自身の「主題」の提示はなく、芥川研究者の代表的な読み方を七種提示する方法を取っている。そのうちの六種は、先行研究の紹介であり、内容的にも目新しいものではなく、他の教科書会社の指導資料でも採り上げられているものである。ただ、一種、「語り手の批評」は他の指導資料にはなく、「教育出版」の指導資料の特筆すべき点は、他の指導資料にはない田中理論を「羅生門」の新しい読み方として提示したことにあるといえる。

(3) 『国語』の指導資料との比較

「羅生門」を『国語総合』に採用した際、各教科書会社は、「羅生門」の教材としての価値を、どのように判断した結果なのであろうか。新たな意義付け、価値の発見などがなされたのか、それとも、定番教材としての安定性を選択した結果に過ぎないのであろうか。このような問いを明らかにするためには、新・旧課程の指導資料に採られている「主題」を検討すれば、自ずと見えてくるのではないかと考えた。

(4) 「学習の手引き」の比較

「羅生門」を採用している教科書の、いわゆる「学習の手引き」を比較・検討すれば 読み のポイントが把握できるのではないかと考えた。「言葉に関して」は各教科書とも大差がなかったが、「発展学習」には各教科書の特徴がよく出ている。

(5) 「羅生門」教材としての価値を考える

「羅生門」の教材としての価値を考える上で重要なことは、生徒に対して、何を問い、何を考えさせることができるか、である。「発展問題」を提示・検討し、「羅生門」の新しい読み、すなわち教材としての可能性を探っていきたい。次の3点が「発展学習」として提示・検討する 読み のポイントである。

- (1) 悪はなぜ実行されたのか
- (2) 「田中理論」は有効か
- (3) 改稿の是非

4 研究の成果と課題

「『羅生門』の教材としての価値」について、実践を通じてより具体的に考察していきたいと考える。

(1) 悪はなぜ実行されたのか

羅生門の楼の下で、下人は 飢え死に か 盗人 かの選択に悩みつつも、頭のなかでは 盗人 になるしか「仕方がない」という結論を抱いていた。そのことは、語り手が「...当然、そのあとに来るべき『盗人になるより外に仕方がない』」と語っていることから、物語の設定として当初から決定されていたのではないと思われる。

それでは、悪 はどのように実行されていったのか。下人にとって、その場所は羅生門の楼上でなければならなかった。そこで下人は楼の下の論理と異なる論理、「死を前提にすれば悪が許される」という論理に出会うことになるからである。それを下人は「自らの特質近づけて『生きるためには悪全般は許される』と思い込んでしま」うのである。その結果、悪 を実行する 勇気 を得たのである。

この下人の「特質」に関しては、「その場の状況や人の意見に流されやすい」ものとして多くの生徒が指摘している。たとえば以下のような感想が代表的なものとして挙げられる。

下人の感情を読んでいたら、人間っておもしろいなぁと思いました。最初、下人が老婆に対して憎悪がわいてきたってところは、何となく気持ちが分かるけど、髪を抜くっていうことに対して、どうして怒ったのかよく分かりません。そして、老婆の話に納得して盗人になろうと決心して、老婆の着物を剥ぎ取って、そういう人の話で人間がここまで考えを変えられるのか不思議だった。感情ってすごい。でも、時々疲れる。

このような読むものを「疲れ」させるほどの感情の変化が、なぜ下人に生じたのか、「羅生門とい

うテキストのなかでは具体的には語られていない。

下人のみならず、「通常の倫理観」を持つ人間が「悪」を働くことは並大抵のことではない。楼の下で、下人が逡巡していたのは当然のことであったと言える。とすれば、「悪」を実行するために必要とされていたのは、人間性の証としての「合理性」を超えさせ、動物的で「生理的」なものだったと言えはしまいか。生徒たちが、下人の感情が分からないと記したのは、そのことを意味していると言える。善悪の判断すらも容易に変わり得る、「直感的」、「生理的」ともいえる感情に支配されることによって、初めて下人は「盗人」に変身できたのではないだろうか。生きるために、楼の下の「通常の倫理観」を否定する手段を「動物的」ともいえる感情に包まれることに求めたのではないだろうか。とすれば、老婆の言葉は単なる「契機」のようなものであったといえる。

ある生徒は「老婆に出会わなかったら、下人は「飢え死に」していたかもしれない」と記している。別の生徒は、「老婆に出会わなかったら、下人は悪い人にならなかったと思います」と記している。こうして、老婆との出会いを「契機」にして、下人は「語り手」が「当然」と語っていたように「悪」を実行することができたのである。

(2) 「田中理論」は有効か

語り手の存在を意識させることによる「読み」の変化は起りうるのか。田中理論は、いわば語り手の存在を二重化したものと捉えることができるだろう。1、物語の進行役としての語り手、2、下人の批判者としての語り手である。田中理論の特徴は2の方にあり、語り手は「下人の認識の陥穽」を読者に明示しており、読者は、「羅生門」から、その下人の「認識の無根拠性、観念の陥穽」をこそ読み取らなければならないと、主張している。

では、生徒たちは語り手の存在に、どのように気づき、その語り手にどのような機能を見出しているのか。生徒の初発の感想を見ると、語り手の存在に関し、「この物語の時代背景は平安のはずなのに『何分かの後』、『二、三年』など本当にこの時代に使われていた言語なのだろうか、疑問に思った」「平安時代の話なのに、フランス語が出てきたので珍しいと思った」「『作者はさっき、下人が雨やみを待っていたと書いた』こんな書き方はしないので印象に残った」等、初読の段階から「羅生門」に顕在している語り手の存在を読み取っているものがいくつかあった。しかし、そのような生徒の割合は、私が受け持っているクラスでは一割以下である。

ただし、これらの数少ない生徒の感想を使用して、小説における語り手の存在についての授業を進めていくと、ほとんどの生徒は語り手の存在について理解を示すことができるようになる。

次に、語り手の機能の問題であるが、通常の語り手と大いに異なる「羅生門」での語り手の存在が、なにゆえ作者によって創り出されなければならなかったのか、言葉を替えるなら、平安時代という舞台設定のなかに、語り手が「現在」という作者性を持ち込もうとした意図を、生徒はどのように理解したのか、また理解できなかったかということである。この点に関しては、生徒たちの理解力を超えた問題であり、教師が生徒に「教え込む」という結果になってしまった。

ここまでで言えることは、教師はどのようにしたら、生徒たちに語り手の機能を、自発的に発見・理解させることが可能となるか、ということになるだろう。

この難問を解決するためには、教師側に授業展開の工夫が求められることになる。例えば、「羅生門」に採られた時代は「平安時代」であるが、作者が「昔」に対してどのような認識を持っていたか、資料を示すなどの授業展開を試みてはどうだろうか。その資料として最も適していると思われるものは、芥川自身の「昔」という小品のようなものであると考える。こうした資料を活用する事によって、少なくとも教師側が一方的に「教え込む」授業の回避に繋がるのではないかと考える。

しかし、田中理論の問題は、この先に存在する。一般に語り手は作者の分身と見られ、作者の考えが語り手を通じて作品に投影されると言えるだろう。通常の授業の場合、そのような前提で

授業を行うことに問題は生じない。だが、田中理論を前提にすると、このような、語り手 と 作者 との混同は決して許されないことになる。作者 は実在せず、あるのはあくまで 実在性 である。それゆえ、語り手 の存在は単に 作者 によって創りだされたものというよりは、テキスト自体の要請に基づき作り出されたものと見るべきとなる。

ここで問題となるのが、すでに指摘した 語り手 の二重性のことである。果たして、語り手 は田中の言うように、下人の「認識の無根拠性、観念の陥穽」を読者に明示しているのだろうか。下人は老婆の現実を半分しか見ることのできない、観念過多の青年として、語り手 によって語られているのだろうか。

そこで、生徒たちの読みと田中の読みの違いに触れておくことは、ある示唆を与えてくれるように思う。それは、老婆と下人に対する見方の相違である。田中は、老婆こそが現実を生きている存在であり、それに対し、青年は老婆の現実を見ることのできない観念的(いわゆる青白い)青年という解釈に立つ。この解釈が田中理論の導く結論であり、おそらく出発点でもある。

しかしながら、生徒たちは、基本的に老婆と下人とに区別をつけてはいない。下人の行きつく先の姿が老婆であると見るのである。生徒の感想のなかには、下人よりも「老婆の論理」に対する反発の気持ちを強く記したものが多く、それは一体何故なのか。田中が言うように、「老婆が言っていることを自分の世界のなかだけで理解し、何故老婆がそう言わざるを得なかったかを理解できなかった」⁽³⁾ためであろうか。確かに《飽食》の時代に生きる生徒たちにとって、老婆の置かれている《飢餓》的状況は想像の及ばないものである。その点では「何故老婆がそう言わざるを得なかった」⁽³⁾のか十分に理解ができない立場に立つ。ゆえに生徒たちの批判は「無効」であるという論は成り立つと言える。

しかしながら、目の前にいる生徒たちもまた、老婆の直面している《飢餓》の問題とは違った意味で、老婆同様、「生命の危機的状況」⁽³⁾のもとで日々生きているといえる存在である。「教室」という狭い世界の中で繰り広げられる人間模様、時には自己の 生・死 がかかる程の危うい 生 を生きていると言っても差し支えない。そうであるからこそ、老婆の言葉から「死人の髪を抜かなければならないような切迫したぎりぎりの生」⁽³⁾を生きている切実感よりも、悪をとがめられた時の開き直りとも思える言葉の方により強い反発を感じるのではないか。たとえ老婆の生きている場所が「人間として最底辺」のところであり、そこから発せられた言葉であるとの前提に立ったものだとしても、生徒たちには「悪いことは悪い」こととして映り、結果、下人の行為と老婆の行為に「軽重」をつけることはない。

ここに田中理論と生徒たちの 読み の違いは明らかであり、決定稿の末尾に対する理解も自ずと違うものになってくる所以がある。

(3) 改稿の是非

教科書教材としての「羅生門」の末尾は、やはり決定稿の「下人の行方は、誰も知らない」でなければならないと考える。「羅生門」という作品が教科書教材として現在まで残りえたのは、決定稿の末尾をテキストとして採用したことと無関係ではない。

ただ、決定稿は作者によって「二年半もの歳月」をかけた後に改稿されたという事実がある。なぜ、初出の末尾は改稿されなければならなかったのか。私は、この改稿問題を考えることもまた、「羅生門」を教室で 読む 価値の一つと考えている。

初出の末尾が、「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつゝあつた」であることは周知の事実である。そして、この初出の末尾を高く評価する研究もまた存在している。ただ、研究的な視点からの価値とは別に、教室で「羅生門」を読む場合、おそらく、この初出末尾のままでは授業は成立しないだろうと推定される。というのも、「羅生門」の話の筋は、下人が「やせて年老いた老婆の着物を引剥ぎし蹴倒し、高揚した気持ちを抱いたまま「夜の底」に駆け下りていく

というものである。そして、下人の未来は 語り手 によって「強盗を働きに」行くと方向付けられている以上、「羅生門」という作品の中心線は、下人が 盗人 になった物語であり、その中心線はくずしようがない。もし、この初出末尾のまま生徒に提示することとなった場合、われわれ教師には、大きな抵抗があるといわざるを得ないだろう。なぜなら、盗人 になるべきでないとの道徳的観点から結論づけることは、明らかにテキストを無視した解釈であるし、だからといって、盗人 になることを肯定的に授業を展開することも、実際できにくいからである。

このようなことを避けるためには、作者としての芥川の実人生を中心的に位置づけ授業展開するしか方法はなく、これでは、テキストや語り手、作者等を実体化してしまうことになる。そして、このような方法は、旧来の授業から一步も出ることのないものであることは明らかだ。私は、基本的にテキストは《実体》でないという立場をとっており、芥川の実人生からテキスト解釈を進めるということは、避けたいと考えているのである。となると、テキストは「下人の行方は、誰も知らない」という決定稿を用いる以外に選択肢は残されていないことになる。

ところが、この決定稿の末尾を用いて授業を試みると、初発の感想を見る限り、「最後に『下人の行方は、誰も知らない』とあるが、いったいどうなったのか、どういう意味なのか分からない」「結局下人は盗人になってしまったのか、それとも、盗んだのは老婆の衣服のみで、結局飢え死にしてしまったのか、この表現だけでは最終的な結論が分からない」など、決定稿の意味の「曖昧さ」「不明確さ」に躓く生徒が出ている。しかし、「羅生門」の授業が終了した後、決定稿と初出稿とを比較させ、作品の印象がどのように違ってくるのか尋ねると、「正直印象が変わったとは思いません」と一名の生徒が書いた以外は、多くの生徒が決定稿の末尾を支持する感想を記している。当初は決定稿の末尾に批判的であった生徒たちもいたが、初出稿の末尾と比較することにより、決定稿の終わり方に納得できると答えたものが多くなった。このことは、決定稿の末尾を理解させるためには、現行のテキストのみを使用するだけでは無理があることを示している。こうした授業方法により、生徒たちは三好行雄が指摘した「必然の一行」⁽⁶⁾であることの意味を理解できるのではないかと考える。

また、決定稿と初出稿の比較させるなかで、なぜ作者が「二年半もの」歳月をかけて改稿に及んだのか、その意味を問うことは更に重要であると考えられる。この問題は「羅生門」という作品に限らず、広く「文学作品」を教室で 読む とはどのようなことか、その意義を改めて問い直すことに繋がるからである。次にその問題に触れてみたい。

ある生徒の感想に「なぜ作者がこんな暗い話を書いたのかよく分かりません」というものがあった。ここでいう「暗い」とは、もちろん死体の転がっている羅生門の様子や異様な年老いた老婆、羅生門の楼上で繰り広げられる人間模様等のすべてを指していると思われるが、それらは下人を是が非でも 盗人 にしなければならなかった芥川にとって、必要不可欠なものであったと言える。そもそも文学作品が作家自身の果たせない願望の表出されたものだとの前提に立つのなら、「羅生門」に描かれた世界は、その当時の芥川自身の願望、「エゴイストになりたいのだ」(「暗中間答」)を実現したものであると言える。それでこそ、初出の末尾が「強盗を働きに」となっていた事情が納得できるのである。とすれば、「羅生門」という作品全体が持つ「暗さ」は、作者自身の「『深いよるべなさ』、『孤独の絶対』という 負の要素」⁽⁷⁾の象徴とみなしてもよいと考える。そして、馬場重行が述べるように「絶望の淵に佇むことが、『希望』や『救い』へと転ずる世界」⁽⁷⁾へと向かうのであれば、「羅生門」に描かれた世界、下人が年老いた老婆を蹴倒し引剥ぎをし、高揚感を抱きつつ「夜の底」へ駆け下りていく姿を描くことにより、芥川自身が「癒され」、改稿への道が拓けたと言える。

もちろん多くの生徒たちは、前述したように下人の行動に強い反発を持つ。また、老婆の論理に対しても同様の反発があり、むしろ下人以上に強い。生徒たちは下人に対して、「その場の状況や人の意見に流されやすく、優柔不断」な人物であり、「他人がしていれば自分もやっていいんだ、自分がよければそれでいいんだみたいな自己中心的な考え方を持っていて、とても最悪だと思いました」と記している。

このような「羅生門」に描かれた 負の要素 に対するこの反発は、一体どのような生徒たちの「内なる 他者」を表しているのだろうか。生徒の内面を深く探ることはできないが、「教訓的」ではない「羅生門」を 読む ことによって、「生きることを多角的・重層的」⁽⁷⁾に捉え直すことがなされたのではないかと考える。つまり、読む という行為を通じて、生徒自身は「内なる 他者」⁽⁷⁾と出会い、「癒され」⁽⁷⁾、「確かな『生』を獲得」⁽⁷⁾できた（できるだろう）と考える。生徒が記した「人間という生物について改めて考えさせられた」「他に生きる道を探してほしかった」という感想がそれを示している。

このように文学作品を 読む ことが、「人の成長に欠くことのできないこうした“糧”をもたらすもの」であるならば、「羅生門」という作品は現代的な教材となりうるのではないかと考える。

本論で検証した幾つかの課題は、「羅生門」という教材のもつ問題を明らかにするとともに、「羅生門」の新しい読み、すなわち教材としての有効性・可能性を実証できたのではないかと考えている。

引用・参考文献

- (1) 田近洵一『新しい作品論 へ、新しい教材論 へ 2』右文書院、1999年
- (2) 関口安義『「羅生門」を読む』小沢書店、1999年
- (3) 田中実『小説の力 新しい作品論のために』大修館書店、1996年
- (4) 田中実・須貝千里（編）『文学の力×教材の力』教育出版、2001年
- (5) 阿部昇「文学を開くための読みの指導過程 構造、形象、吟味」(『これからの文学教育のゆくえ』右文書院、2005年
- (6) 三好行雄『芥川龍之介論』筑摩書房、昭和51
- (7) 馬場重行「『読み』の原理へ」(『日本文学』VOL55 - 8)

*五社(種類)の指導書

*本稿で引用の本文は、『芥川龍之介全集』(岩波書店)

*教科書は教育出版『国語総合』を用いた。

*感想文は、高知県立高知南高等学校一年生のものである。

研究概要

研 修 先	高知大学大学院
在 籍 校	高知県立高知南高校
氏 名	奥谷 俊子
研 修 課 題	文学作品における新しい指導法の開発 芥川龍之介「羅生門」の新しい教材観
要 旨	平成15年4月から登場した『国語総合』の全ての教科書に芥川龍之介の「羅生門」が採録されている。全ての教科書に同一の教材が揃うことは、これまでに例がなく、ある意味特殊な出来事であると考えられる。それだけに、この出来事は、われわれ現場の教員に大きな課題を与えたことになる。「今、なぜ『羅生門』か」、本研究は、高等学校国語科教科書に 定番教材 として採録されている「羅生門」の教材的価値を問い直し、新たな教材観を提示することを目的として行うものである。そこで、田中実が提唱する新しい「小説の読み方・読まれ方」、つまり、語り手の領域を 読む という「田中理論」の有効性について研究を進めた。
キーワード	定番教材 教材価値 田中実 新しい「小説の読み方・読まれ方」 語り手